

本学では、現在、大学創立時から図書館に収蔵・蓄積されてきた貴重資料（注1）を学内プロジェクトを設けて順次整理・修復し、一部を当図書館にて公開しています。

初回の展示（平成18年10月～平成19年1月）は、明治期の熊本の絵図や江戸時代の世界地図など個人蔵を含めた9点であり、概要は以下のとおりです。

（注1）熊本洋学校の教科書、郷土研究家上妻博之氏や平野流香氏収集の古典籍など江戸後期から明治・大正期の史料数千点を所蔵。初代学長の北村直躬氏を所長とする熊本女子大学郷土文化研究所が昭和26年から昭和45年まで活動していた当時に収集されたものが数多く含まれているものと思われます。

古文書プロジェクト構成（H18年度発足）

リーダー
学術情報メディアセンター長
松岡 泰

メンバー
文学部助教授 川平敏文
" 鈴木 元
" 米谷隆史
総合管理学部教授 渡邊榮文
(事務局) 図書館

「白川県肥後国熊本全図」 一舗 明治6～8年頃



縦91.0×横67.0センチ。木版色刷り。坂田信存発行。

明治4年の廃藩置県により、熊本藩が熊本県となりますが、その後いく度か分離・統合が繰り返されます。その過程で、明治5年6月には熊本県は白川県と改称され、この名称は明治9年の2月まで続きます。そうした歴史的背景を映し出した地図です。現在の二本木に県庁が置かれていますし、熊本城が鎮台兵舎として記されています。現在の地図と対比することで、興味深い相違が幾つも見つかることでしょう。朱で刷られている部分は寺院を示すようです。なお同じ熊本全図は、

北海道大学附属図書館北方資料室にも伝存しています。

（解説：文学部助教授 鈴木 元）

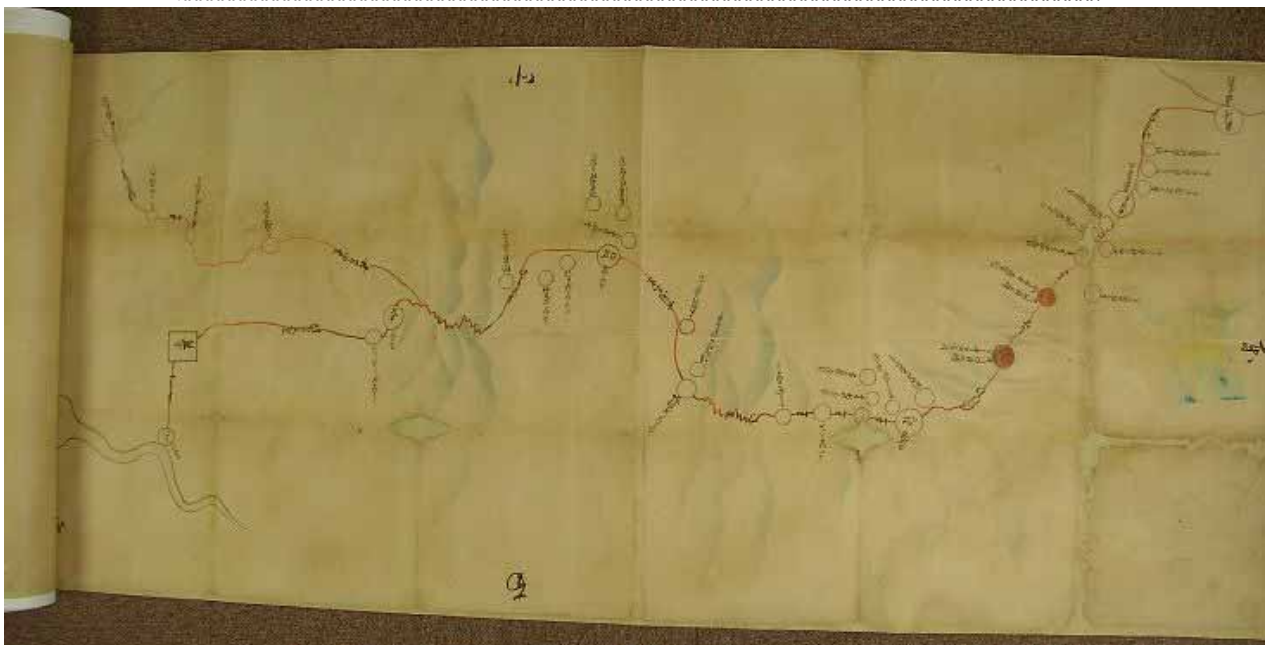


縦48.2×横68.8センチ。榎原義長製図。
銅版色刷り。大阪、書籍会社発行。

今日の熊本県の圏域とほぼ同じ域が収められています。「国勢細見図」という名所からも窺われるように、画面右下には当時の戸数、人口、郡数、町村数といった情報が記載されています。また、あわせて神社、火山、温泉などの情報も記されており、地誌的な役割も帯びていたようです。同じ細見図は岐阜県図書館にもあります。銅版印刷で一定の部数が刷られたためか、現存

するものはなお幾部かあるようです。

(解説：文学部助教授 鈴木 元)



縦72.2×横226.0センチ。

参勤交代の道筋を示し、主要な宿場や村までの距離を記しています。同時に各村の戸数を記しているのも注目されます。伝来などについてはまったくわかりませんが、おそらく熊本藩にかかわるものと考えてよいでしょう。

細川重賢の妹の紀行日記『海辺秋色』の記事などと照らしあわせ、道筋をたどってみるのも一興です。

(解説：文学部助教授 鈴木 元)

節用集(下記(注)を参照)に世界地図が合冊されるようになるのは元禄年間頃からですが、



概ね本書と同じような地図が掲載されています。

本書で注目されるのは上欄にある「万国人物正図」です。「大日本」「大明」「朝鮮」から左に「呂宋」までは実在の国々ですが、以降「長臂国(肱から先が長い種族の国)」「後眼国(頭の後ろに眼がある種族の国)」等の姿が示されます。交易があった「南蛮」もそうした実在しない国々の並びに配されているので

(個人蔵)

す。なお、これらの絵は中国で編纂され

た『三才図絵』という本の影響を受けたものです。

地図としても、北極圏周辺が「夜国」とされていることや、位置は不明確ながら南北両回帰線に関する記述が存することなど、案外に進んだ知識が記されている一方、「おらんだ」が島状であったり、北ヨーロッパの辺りに「小人」の国が、日本の東北海上に「銀のしま」があったりと、なお過去からの伝聞等によって補われた部分が多く見られます。(解説:文学部助教授 米谷隆史)

(注)節用集(せつようしゅう)とは

節用集は室町時代の中頃に成立した国語辞典の一種です。漢字表記される語を語頭のイロハ順に分類し、その内部をさらに「門」という語の意味で分類するのが最も一般的な形式です。江戸時代に入って出版が盛んになった結果、幕末までに様々な形態のものが数百種類も刊行されています。まさに江戸時代を代表する辞書といえるでしょう。

節用集は、17世紀前半までは概ね辞典部分単独で商品とされていましたが、17世紀後半以降は地図や武鑑(大名の職員録のようなもの)書簡文例等、生活に必要な内容を記す頁が付録として合冊されるようになり、いわば日常百科事典のような性格を持つに至ります。今回は、熊本の地図の展示に因んで、節用集に掲載される世界地図の変遷を御覧いただきます。

節用集の付録部分に掲載される情報は、必ずしも各時代の先端的研究を反映してはいません。例えば、マテオ・リッチの『坤輿万国全図』系統のかなり詳細な地図は江戸の早い時期に招来していますが、それらがそのまま当時の節用集に掲載されているわけではないのです。しかし、節用集は多くの人々が購入し、参照した書物ですから、これらの地図は刊行当時の人々の世界観や基礎的教養のあり方に大きな影響を与えたものと考えられます。現代人の目から見て不正確なところも、各々の時代に即した目で分析してみることが必要なのではないのでしょうか。

(解説:文学部助教授 米谷隆史)



左...「悉皆世話字彙墨宝」

右...「都会節用百科通」(次ページ)

とかいせつようひゃかつう
都会節用百家通 寛政13年(1801)刊行



(文学部日本語学研究室蔵)

「飛行船」の情報は天明年間(1781~1788)にエレキテルの発明などで有名な平賀源内が伝えたものと言われています。

地図としては よりもやや大づかみな印象がありますし、相変わらず「小人国」も存在します。しかし、西ヨーロッパ周辺は随分正確になっていますし、にあった「銀のしま」はなくなっています。また、オーストラリア大陸と見られる地域について「新阿蘭陀 ヲランダ人近代此所ヲウバフト云」とあるのは、1644年にオランダ人のアベル・タスマンがオーストラリア大陸を「ノバ・ホランディア」(英訳するとニュー・ホーランド)と命名したことを承けるものでしょう。

なお、左上に「飛行船」の図がありますが、もちろん現物は当時存在しません。

(解説:文学部助教授 米谷隆史)

やまとせつようしゅうしかいぶくろ
倭節用集悉改囊 文政元年(1818)刊行



(文学部日本語学研究室蔵)

見られます。例えば、アフリカは「亜弗利加」とありますが、二音節目は中国の地図では「非」または「斐」を用いるのが普通です。日本語ではこの二種類の漢字で「フ」を表わすことが難しいため、「弗」による表記が工夫されたものと見られます。(解説:文学部助教授 米谷隆史)

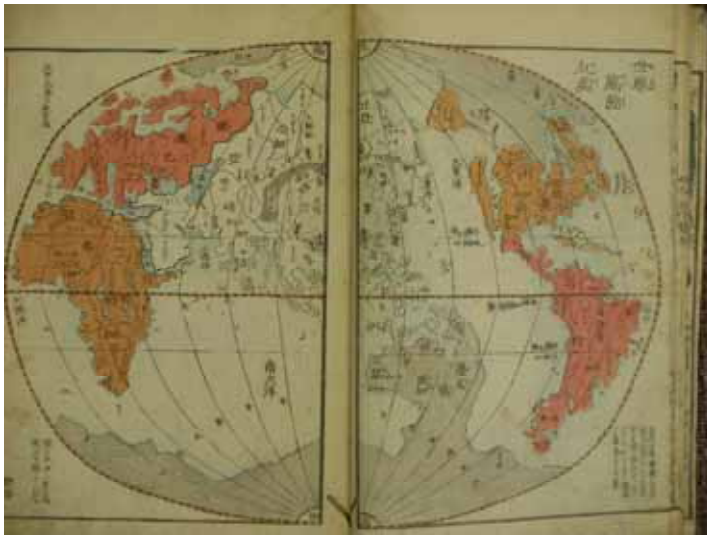
オーストラリア大陸が南極大陸とつながっていることやマダガスカル島が無いことを除けば、大陸の形も整っていますし、「北極」「南極」「赤道」「大西洋」などの用語にも現代と共通するものが増えてきます。両回歸線の位置もかなり正確です。これほど正確な地図であるにもかかわらず、南米大陸南端に「長人国」(の上欄も参照)が残されているのは興味深いところです。

なお、外国地名の漢字表記は古来から中国で使用するものを流用することが多いのですが、本図には日本独自のものが



左...「倭節用集悉改囊」

右...「大日本永代節用無尽蔵」(次ページ)



だいにほんえいたいせつようむじんぞう
大日本永代節用無尽蔵 第二版

嘉永2年(1849)刊行

地形や地名の上では、は と大きな相違はありません。しかし、経線下部に十二支が宛てられ(右から丑・寅・卯~子)、右下に「元来一世界団円ナルヲ以テ大西洋此地ニ合ス。子亦丑ニ合ス。此理ヲ須知スルトキハ、ブラジルノホルトガルノ隣国ナル事明ラカニ可覧。」として地図の左右が連続するものであることを特記していることは注目されます。

(個人蔵)

(解説:文学部助教授 米谷隆史)

だいにほんえいたいせつようむじんぞう
大日本永代節用無尽蔵 第三版

文久4年(1864)刊行

と同じ書名ですが、15年後に改板された では掲載の地図がかなり本格的なものに変更されています。世界地理についての常識が次々と更新されていった幕末の状況を反映しているものといえるでしょう。なお、この段階の地図に至っても横書きが全く採用されていないのも興味深いところです。

(解説:文学部助教授 米谷隆史)



(個人蔵)

だいにほんえいたいせつようむじんぞう
大福節用無尽蔵 「世界万国之略図」 文久3年(1863)



(個人蔵)

幕末の節用集としては、や の段階に近いやや古い地図を踏襲しています。船が帆船であることも若干の古めかしさを感じます。ただ、アジア地域以外に記されるのがオランダに代表されるヨーロッパ地域ではなく、アメリカ地域であることになんらかの時代性を読み取るべきかもしれません。(解説:文学部助教授 米谷隆史)



左... 「大日本永代節用無尽蔵」
右... 「大福節用無尽蔵」